

金銀小判

小川未明

青空文庫

ひとりもの 幸作は、家の中に話し相手もなくその日を暮らして
 いました。北国は十二月にもなると、真つ白に雪が積もります。
 そのうちに、年の暮れがきまして、そこ、ここの家々では餅を
 つきはじめました。

隣は地主でありまして、たくさん餅をつきました。幸作は、
 そのにぎやかな笑い声を聞きますと、どうかして自分も金持ちに
 なりたいものだと思ついたのであります。

やがて、わずか日がたつとお正月になりました。けれど独
 り者の幸作のところへは、あまりたずねてくる客もなかつたの
 です。結局そのほうが気楽なものですから、幸作は、こた

つに入はいつて寝ねていました。

外そとには雪ゆきがちらちらと降ふつて、寒さむい風かぜが吹ふいて、コトコトと窓まどの戸とや、破やぶれた壁かべ板いたなどを鳴ならしていました。元がんじつ日も、こう

して無ぶ事に暮くれてしまった夜よるのことでもあります。

「両りよう替がえ、両りよう替がえ、小判こばんの両りよう替がえ。」と、呼よんで歩あるく子こども供も

の聲こえが聞きこえたのであります。

毎まい年ねんこの夜よは、お宝たから船ふねや、餅もち玉だまの木きに結むすびつける小判こばんをこうして売うつて歩あるくのであります。

けれど、この晩ばんは雪ゆきが降ふつていましたから、いかにもその中なかをこうして呼よんで歩あるいている子こども供もの聲こえが哀あわれに聞きこえたのであります。

「両替、両替、小判の両替。」という声は、風のままに遠くになったり、近くになったりして聞こえてきたのであります。

こうして、子供は呼んで歩きましたけれど、だれも買ってくれようがないとみえて、その声はとぎれなくつづいていました。どんなに外は寒かろうか？ こたつにあたつて寝ていました。幸作は思いました。そして、子供はもう我慢がしきれなくなつたとみえて、今度は、一軒一軒ごとに入つて、

「小判を買ってください。」と、頼んでいるようでありました。おそらく、家の中には、人々は酒を飲んだり、かるたをとつたり、また、いろいろなおもしろい話をして笑っているのだと思

われしました。しかし、だれもこの貧乏な子供に同情をしてくれるものがないとみえました。その子供は地主の家でも断られたとみえます。

子供は、泣き出しそうな声をしながら、

「両替、両替、小判の両替。」といいながら、こつ

ちに歩いてきました。やがて、幸作の家の戸口で、げたについた雪をはらう小さな足音がしました。

「今晚は、どうか小判を買ってください。」と、子供は、戸の外でいいました。

幸作はかわいそうに思つて、こたつから出て戸のそばにいきました。そして、戸を細めに開きますと、外は身を切るような寒

い風かぜが吹ふいて雪ゆきが降ふっています。まだ八つか九つになつたばかりの子供こどもが、真まつ白しろの体からだをして、すすけたうす暗くらいちようちんをさげていました。

「おおかわいそうに。」と思おもつて、幸作こうさくは、小判こばんの一ひとつ包つつみを買かつてやりました。

子供こどもは、幾いくたびもお礼れいをいって出でていきました。幸作こうさくは、せんべいで造つくつた小判こばんをねずみに食くわれてはつまらないと思おもつて、それを戸とだなの中なかにしまつて、またこたつに入はいつて、いつしかグーと寝ね入いつてしまいました。

幸作こうさくは夢ゆめを見みました。それは、買かつた小判こばんがほんとうの金きんぎ銀ぎんの小判こばんで、自分じぶんは大金持おおがねもちになつたといふ夢ゆめを見たのであ

ります。彼は驚きと喜びから目をさしました。そして、自分はいつしかこたつに入つて眠つたことに気づきますと、すべてが夢であつたと思われてがっかりとしたのであります。

しかし、どうしてもそれでは、なんとなくあきらめられないよ
うな気持ち^{きも}がして、わざわざ起き^お出^でて、戸^とだなを開^あけて、小判^{こばん}を
取^とり出^だしてみますと、それは取^とり上^あげられないほどの重^{おも}みがあり
ました。幸^{こう}作^{さく}は、ますます不思議^{ふしぎ}に思^{おも}つて、それを両^{りょう}手^てでつ
かんで畳^{たた}の上^みへ下^おろしてみますと、いつのまに變^かわつたのか、ま
つたくほんとうの金^{きん}銀^{ぎん}の小判^{こばん}の包^{つつ}みでありました。

こうなると、幸^{こう}作^{さく}は、急^{きゆう}に欲^{よく}心^{しん}が起^おこりました。あのとき、
もう一^{ひと}つ^つ包^かみも買^かつておけばよかつた。そうすれば、自^じ分^{ぶん}は村^{むら}じ

ゆうで第一だいいの金持ちかねもちとなつたのだと思ひました。

彼は、あの子供こどもがどこへいつたろうと思ひました。まだ探した
ら、いないこともないと思ひまして、彼は、子供こどもを探さがすために家
を飛び出だしました。そして子供こどもを見つければ、みなその小判こばんを買
い取ろうと考かんがえました。ちようど、町まちは二日の売うりぞめになつて
いまして、暗くらいうちから起おきていました。また、みなは買かいぞめ
の朝あさであつたから、夜中よなかから町まちへいつて、福ふくにありつこうとして
いました。いわば元日がんじつの夜よはこの地方ちほうでは、みんな寝ねないとい
つてよいくらいで、町まちの方はもうにぎやかでありました。幸作こうさく
は雪路ゆきみちを歩あるいて町まちへいききました。すると、

「両替りようがえ、両替りようがえ、小判こばんの両替りようがえ。」という呼よび声こゑがほう

ぼうで聞きかれました。彼かれは、もしや、その子供こどもではないかと走はしつていきましたが、それは、まったくちがった人ひとが売うつて歩あるくのでありました。

「これは、おれはふだんしょうじきもの正直者しよくだから、神さまがきつと金かねをお授さずけくだされたのだ。」と、幸作こうさくは思おもいました。

「神かみさま、どうかもうすこしお金かねを授さずけてください。私わたしは村むらじゅうでのいちばん金持かねもちになつて、いままでいばつていたやつらを見下みおろしてやりますから。」と、幸作こうさくは願ねがいました。

そのうちに夜よがほのぼのと明あけると、哀あわれな小判売こばんうりの子供こどもは、ある大おおきな素人屋しろうとやの軒のきの下したで疲つかれて眠ねむっていました。雪ゆきが体からだにあたまあたまにも真まつ白しろに吹ふきつけていました。そして、箱はこの中なかの小判こばんは、

すこしも売れずにいました。ちようどそこへ通りかかつてこれを
 見つけた幸作は、大いに喜んで、これはまったく神さまのお授
 けにちがいないといつて、眠っている子供を揺り起こして、みん
 な箱の中の小判を買い取りました。子供は眠そうな目をこすつて、
 びつくりした顔つきで幸作をながめました。彼は、勇んで家に
 帰りました。そして、戸だなの中から、昨夜買った金銀の小判
 を取り出してみようとしますと、また、いつ変わったものか、や
 はりせんべいの小判であつたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

初出：「良友」

1920（大正9）年1月

※表題は底本では、「金銀小判《きんぎんこばん》」となっております。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2013年10月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

金銀小判

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>